

加賀藩における平士頭分と役料

小 西 昌 志

はじめに

木村信尹が著した「諸頭系譜」^①は加賀藩における諸頭・諸役の歴代藩士をまとめたものである。筆者はその史料集の刊行に携わる機会を得た。その諸頭・諸役の記載順は加賀藩職制の序列を反映していることは理解し得るが、その序列の細部については不明な点が多い。そこで、本稿は加賀藩士の職制について考えてみたい。

一二〇万石といわれる加賀藩の藩士数は多く、御歩以上の直臣でも二〇〇人以上である。藩士の身分階層については、「八家」と呼ばれ人持組頭を勤める年寄層^①を筆頭に、②人持、③平士、④与力、⑤歩、⑥足輕、⑦中間・小者に大別される^②。これらの諸階層についての研究は、年寄層については、五万石の本多家をはじめとした万石以上の階層で、加賀藩職制の最上位層として研究^③が進められているが、「人持」以下の諸層については、その階層に

焦点を当てた研究は無く、平士以上で諸役を勤めた人物が政治上等の登場人物個人として分析対象となっているに過ぎない。また、職制においても諸頭・諸役については個別の分析もなく、戦時の「番方」、平時の「役方」という分類にとどまっているのが現状といえる。

本稿では、藩士諸階層の中でも平士層を対象とする。平士内においても石高の高下や諸組など様々な階層性があるが、特に「頭分」と呼ばれた平士に注目し、加賀藩における平士内の階層性と諸役の関係を役料の視点から位置づけを試みるものである。

そのためには、加賀藩士の構成を確認しなくてはならないが、それを数的に確認できる史料は少ない。富田景周が記した侍帳「帳秘藩臣録」^④は、文化四年（一八〇七）頃の藩士の石高・人名等が御歩まで記されている。足輕については概数として四〇〇〇人としているものの、直臣について加賀藩士の全体的な構成が確認できる貴重な史料であ

る。

それによると①八家八人、②人持六八人、③平士一二〇二人、④与力二九一人、⑤御歩四三三人、御歩並三九七人、⑥足輕約四〇〇〇人である。平士層の割合は、足輕を除けば二三八八人の約半分を占め、足輕を含めば二割に満たない。平士層の石高分布の概要は、一〇〇〇石以上六六人(約五・五%)、五〇〇石以上一〇〇〇石未満一七〇人(約一四・一%)、二五〇石以上五〇〇石未満二九六人(約二四・六%)、一五〇石以上二五〇石未満三五八人(約二九・八%)、一〇〇石以上一五〇石未満二一七人(約一八・一%)、一〇〇石未満(約七・九%)である。平士層の半数以上が二五〇石未満(約五五・七%)であることが確認できる。その様な二五〇石未満の平士の中にも「頭分」と呼ばれる者が多く存在し、石高による階層とは異なる平士内の階層がある。その頭分の実態、加賀藩職制の一端を明らかにしたい。

なお、本稿では、各頭分や各役職の始まりや変更などの画期が明確ではない場合、機械的ではあるが、平士頭分の最高位である定番頭が新設^⑤された元禄三年(一六九〇)から慶応の軍制改革以前までを対象とし、その前後については、必要に応じ各事例において触れることにする。また、いわゆる「番方」・「役方」について、後述するが加賀藩で

は番方の役職には役料が付き、役方には役料が付かない役職が多いことから、混乱を避けるため「番方」・「役方」ではなく「組方」・「御用方」を便宜的に使用することにする。なお、幕府の役料についての研究は少ないが、泉井朝子氏が「足高制に関する一考察」^⑥において享保の改革における足高制成立までの過渡的な制度として役料について論述している。幕府重臣層の役料制と直接比較できるものではないが、その違いも確認したい。

一．平士頭分の序列と役料知

平士頭分については、湯浅祇庸が文化二二年(一八一五)に著した「北藩秘鑑」^⑦(巻五)によると、「頭分御役人高御定」として二七の頭分をその定員と共に挙げている(表1)。頭分の人数は、数不定を除けば二一〇人であるが、数不定の頭分を含めた人数は、先の文化四年頃の「帳秘藩臣録」では一四〇人であった。平士一二〇二人の中の頭分は約一二%で、その役料知の総高は二万一四〇〇石であった。

これらの頭分は、戦国期以来のものも多いが、その後、五代藩主綱紀により延宝二年(一六七四)の持筒大組頭の

表1 頭分と定員

定員	頭 分				
4人	定番頭				
12人	馬廻頭				
6人	小将頭	歩頭	大小将番頭	大小将横目	
2人	町奉行	新番頭	奥小将番頭	表小将番頭	小松馬廻番頭
	台所奉行	細工奉行	奥小将横目	表小将横目	
1人	魚津在住	今石勤等支配			
3人	大組頭	金沢留守居番			
7人	持方頭(持弓頭3人 持筒頭4人)				
21人	先手物頭(先弓頭7人 先筒頭14人)				
8人	組外番頭	定番馬廻番頭			
数不定	定番頭並	組頭並	物頭並	使番	

「頭分御役人高御定」(「北藩秘鑑」)より作成

新設から始まり享保期にかけて職制改革の一環として整えられていった^⑧。特に、延宝五年・天和二年(一六八二)・元禄一〇年(一六九七)にはまとまった頭分についての改編が確認できる。延宝五年には、新番頭・定番馬廻番頭・御横目の新設、馬廻頭と小将頭の序列入れ替え、歩組裁許を歩頭に、先弓筒足軽組の二一組極などが行われている。天和二年には、馬廻組・小将組・定番馬廻組の組極が行われ、元禄一〇年には、表小将番頭・同横目が新設され、組外組の組分が行われ、組外番頭の序列が大小将番頭の上列とするなどの改編が行われた。その他、元禄三年に平士頭分の最上列に位置づけされる定番頭が新設されたことは一つの画期ともいえる。また、正徳三年(一七一三) 物頭並、同四年頭並・享保元年(一七一六) 組頭並がそれぞれ初めて命ぜられるなど、頭分の中でも調整的な頭分が揃い、ここに至り基本的な頭分の構成は整ったと言える。

平士頭分には頭により三〇〇石・二〇〇石・一五〇石・一〇〇石の四段階の役料知が与えられている。役料知とは、頭分を含めた諸頭・諸役を勤めた者に在任期間中に与えられる役料の内、石高(知行)で与えられるものであり、本高と同様に藩主からの宛行状も算用場からの所附^⑨も存在する。但し、役料は全ての諸頭・諸役に与えられるもの

ではなく、限られている⁽¹⁰⁾が、特に一〇〇石以上の役料知を伴う諸頭・諸役を勤めた平士が頭分とされている。

役料知は家に附いた家禄とは異なり、個人に附いた高であることが特徴で、「諸頭系譜」を著した木村信尹はその序である系譜備考に「頭トナル者、其家ニ不依、其禄ニヨラス、其人ノ器量ニ有テ重シトス」と記している。木村は、頭分となる人物について、個人の「器量」を重点として決められると述べているのである。木村の「器量」は家柄や禄の高低ではなく、純粹に個人の能力を指していると考えられるが、「器量」の具体的な内容は明確ではない。また、「器量」を「重シトス」ることから、個人の「器量」をかなり重視はするがそれのみではないとも読め、本稿では就いた頭分・役職の内容から家柄や家禄等を考慮し、それ以外の事由を「器量」とする⁽¹¹⁾。

ともかくこの点については、定番頭まで勤めた平士で家禄が最も低い笠間九兵衛定懋の事例⁽¹²⁾で見ることにする。定懋の祖父安右衛門は算用者（御歩並）で、算用者小頭並を経て享保一四年（一七二九）組外組に列する平士となった。父源左衛門は算用者小頭並を経て、宝暦六年（一七五六）改作奉行、明和元年（一七六四）五〇石加増されて家禄二一〇石となり明和五年に亡くなっている。定懋は、明

和五年家督を継ぎ、安永六年（一七七七）定検地奉行加人、同八年勝手方御用、天明元年（一七八二）内作事奉行、同五年外作事奉行、同六年勝手方御用帰役、改作奉行兼帯など諸役を歴任し、寛政三年（一七九一）五〇石加増し二六〇石となり、同時に改作奉行・勝手方御用を勤めたまま役料知一五〇石の頭分、物頭並となる。寛政五年には役料知二〇〇石の組頭並となり算用場奉行を勤める。文化元年（一八〇四）に一度頭役御免となるが、その後文政七年（一八二四）に役料知三〇〇石の定番頭となり、同九年隠居料三〇〇石を拝領し静閑と名乗り、同一年に亡くなっている。

定懋の祖父・父ともに「器量」があり、歩並から平士、加増を経ているが頭分に至っていない。定懋はその「器量」により加増および頭分（物頭並↓組頭並↓定番頭）を勤めている。最終的には家禄を上まわる役料知を得ているのであるが、子の儀左衛門は頭分に就かず、孫の俊太郎は役料知一五〇石の大小将番頭を勤め明治維新を迎えている。この笠間定懋の事例からは、頭分になる人物は家柄や家禄は大きな問題ではなく、「器量」や勤め方が重要であることが確認できる。

そのような頭分における一〇〇〜三〇〇石の役料知の差は、「器量」の差ではなく、頭分内の序列（座列）にほぼ対

表2 年頭御礼における頭分の座列

列	頭 分	役料知 (石)
1	定番頭	300
2	定番頭並	300
3	馬廻頭	200
4	小将頭	200
5	組頭並	200
6	町奉行	200
7	新番頭	150
8	歩頭	150
9	大組頭	150
10	持弓筒頭	150
11	金沢留守居番	150
12	先手物頭	150
13	物頭並	150
14	貞林院様附物頭並	150
15	奥小将番頭	150
16	表小将番頭	150
17	組外番頭	150
18	大小将番頭	150
19	定番馬廻番頭	100
20	使番	150
21	台所奉行	100
22	細工奉行	100
23	奥小将横目	100
24	表小将横目	100
25	大小将横目	100
26	役御免頭	0

「年頭御作法」(「北藩秘鑑」)より作成

頭と歩頭の序列については、同じ歩組の頭ではあるが、新番御歩は平土の子弟であり、その頭である新番頭が歩頭の上列になったものと考えられる。次に、藩主との遠近関係に対応した序列である。小将(小姓)関係であれば、奥小将↓表小将↓大小将であり、平土組では大小将組↓馬廻組↓組外

応していることが確認できる。「北藩秘鑑」(巻二)における年頭御礼の序列では、八家・家老・若年寄と続き、その後の人持に続き表2のとおりで、定番頭、同並、馬廻頭、小将頭、組頭並、町奉行と続いている。人持から町奉行までが大広間上段に着座し、新番頭以下は二之間での御礼である。頭分の序列と役料知の石高がほぼ対応していることから、元禄三年(一六九〇)役料知三〇〇石の定番頭の新設により平土頭分の序列、上下関係が役料知で確定されたとみえる。

では、平土頭分の序列は何によって決められていたのだろうか。組方の頭分については、その序列は以下の三つ基準の組み合わせにより定められていると考えられる。一つは、定番頭は平土組(定番馬廻組)と歩組(定番歩組)の頭、馬廻頭・小将頭はそれぞれの平土組の頭、新番頭(新番組歩頭)・歩頭は歩組の頭、大組頭(持筒大組頭)から先手物頭(先弓頭・先筒頭)は足軽組の頭(物頭)である。これは、身分階層の異なる組の序列(平土組↓歩組↓足軽組)に対応した頭の序列といえる。そのため、新番

表3 組と頭分の序列関係

高 ← (序列) → 低

役料知 (石)	平士組 (+歩組)	平士組				歩組	足軽組	
	定番馬廻組	大小将組	馬廻組	組外組	定番馬廻組		(藩主隊)	(人持隊)
300	定番頭				(定番頭)			
200		小將頭	馬廻頭					
150						新番頭		
						歩頭	大組頭	
							持弓筒頭	
							留守居番	先手物頭
				組外番頭				
100		大小将番頭						
			馬廻番頭		定番馬廻番頭			
		大小将横目						

高
↑
(序列)
↓
低

組・定番馬廻組である。足軽頭(物頭)では、藩主部隊である大組頭・持弓頭・持筒頭・金沢留守居番・人持組頭の配下となる先手物頭である。最期は、同一組内における序列である。大小将組の場合など、組頭↓番頭↓横目である。その他、定番頭並や組頭並・物頭並などの「並」はそれに準じるが組を預からない頭分であり、役料知は同じであるが序列は下である。

これらの基準の組み合わせをまとめると、表3の関係となる。全体的な序列が決まっていると考えられるが、これらのみで決まっているわけではない。そのため一部齟齬している序列がある。先ず、馬廻頭と小將頭の序列であるが、上記の基準では小將頭が上列となるはずであるが逆転している。これに関しては、「諸頭系譜」「藩官職通考」とともに、延宝五年(一六七七)三月に小將頭の次列であった馬廻頭がその上列に決められたことが記されている⁽¹³⁾。また、組外番頭が大小将番頭の上列にあることについては、大小将組を率いる小將頭の下で組をまとめる大小将番頭に対し、組外番頭は番頭ではあるが、五代藩主綱紀が「小將番頭より重き筈にて候、近習・組外両番頭共に組頭無之候」⁽¹⁴⁾と述べるように上位の組頭が存在せず、組外組を率いる頭分であることによる。また番頭に関しては、表2には記されていない頭分として馬廻番頭がある。馬廻番頭は元禄五年から八年の飛州高山在番に際して命ぜられ、役料知一〇〇石、大小将番頭の次列に配されたものである。その後は欠役で文政一二年七月から再び命ぜられていることから、文化一二年の表2には記されていない。文政一二年以降は役料知一〇〇石、序列については、「諸頭系譜」では大小将番頭と定番馬廻番頭の間に配されている。

その他、使番は役料知一五〇石にもかかわらず序列は役料知一〇〇石の定番馬廻番頭の次列である。このことについて、「藩国官職通考」によると、万治二年（一六五九）に使番は一度指止めとなり、この時までの序列について「座列は足輕頭（物頭）の下、諸番頭の上列也」であった。その後延宝元年に一人が再び命ぜられたときは「諸番頭の下に列」せられたとしている。その経緯から序列は下がったが役料知はそのままとなった可能性がある。同様に役料知一五〇石で序列は定番馬廻番頭の次列である頭分に御横目がある。享保・元文・天明の各期に指止めとなり、文政元年に再起となったため、文化一二年の「北藩秘鑑」には頭分とされていないが、「諸頭系譜」では使番の上列に置かれている。なお、この使番・横目から定番馬廻番頭や小松馬廻番頭など序列は上で役料知が低い頭分へ異動した事例（「諸頭系譜」）が確認できる。享保一〇年奥小将組から使番になった本保義兵衛長憲は一〇〇石加増され家禄三〇〇石となり、享保一三年には定番馬廻番頭を命ぜられるが「料知先役之通百五拾石」であった。また、横目であった横井甚五左衛門重政は享保元年小松馬廻番頭を命ぜられるが「前御役料之通百五拾石」であった。このようにいずれの場合も「先役之通」役料一五〇石が与えられている。

以上、頭分の序列は、その配列から複数の基準により全体的に決められていることが窺われ、その序列には役料知三〇〇石く一〇〇石を宛て上下関係を整えている。また、役料知が同じであってもその序列には上下関係が存在し、一部序列と役料知に逆転があっても、「先役之通」の役料知により序列の上下関係は保持されていたのである。

二、平士頭分の異動

平士は、様々な諸頭・諸役を勤める。四段階の役料知により序列が整えられた頭分はどのように異動したのであるうか。全ての平士が頭分になるわけではなく、六三才にして漸く役料知一〇〇石の小松馬廻番頭に至った大久保半兵衛（家禄四〇〇石）や、使番・物頭並・組頭並を経て四三才で役料知三〇〇石の定番頭並となり、五三才には人持末席に至った勝尾半左衛門信处（家禄四〇〇石く一一〇〇石）等様々な事例があるが、頭分内（頭分から頭分）の異動について数例であるが事例を挙げ、その傾向を確認しておく。定番馬廻組家禄一〇〇石の大平欣大夫以道⁽¹⁵⁾は、安永九年（一七八〇）新番組御歩に召し出された。天明三年（一七八三）新知一〇〇石で一〇代藩主重教隠居後の近習とな

るが、「不調法」により翌四年能登島に流刑、翌五年流刑赦免されている。その後寛政六年（一七九四）に家督一〇〇石を嗣ぎ、寛政二二年定検地奉行加人⁽¹⁶⁾、翌享和元年（一八〇一）本役となり、その後改作奉行・勝手方御用等を勤め、文化四年（一八〇七）病気により一時御免、文化七年には改作奉行に帰役する。そして文化一一年「役義格別出情相勤」により五〇石加増され家禄は一五〇石となる。そこから文化二四年役料知一〇〇石の頭並となり文政二年（一八二〇）役料知一五〇石の組外番頭、文政五年物頭並となり文政九年に亡くなっている。大平以道は改作奉行等の勤め方が評価されなければ多くの平士がそうであるように頭分には至らなかったと考えられる。しかし、文化一一年加増により家禄一五〇石となり、頭分を勤めることができる最低家禄⁽¹⁷⁾に届き、「勝手方御用、改作奉行兼」のまま頭並となったのである。流刑や病気、低い家禄などのためであろうか、新番組御歩に召し出されてから頭分である頭並に至まで三七年、家督を嗣いで後二三年を要している。しかし、その後は数年で組外番頭→物頭並と役料知・序列が上がる方向で異動したのである。

浅加九之丞友郷⁽¹⁸⁾は家禄六〇〇石で、寛政六年幼少のため「三之一」⁽¹⁹⁾（二〇〇石）で家督を嗣ぎ、享和二年組

入している。文化一三年役料知一〇〇石の頭分である表小將横目となり、文政五年には役料知一五〇石の竹沢御殿側番頭となる。文政七年九月には竹沢御殿で隠居していた二代藩主斉広の死去により一時御免となるが、一〇月には先簡頭、文政九年には金沢留守居番、同一年には持簡頭、天保三年（一八三二）には大組頭、同六年には歩頭、同九年に依願御免、翌年に亡くなっている。文政五年に役料知一五〇石となつて以来天保九年まで役料知は変わっていないが、番頭→足輕頭→歩頭と上位序列に異動しており、また、同じ足輕頭内でも先簡頭→留守居番→持簡頭→大組頭と上位序列に順次異動している。

文化元年二五才で家督三〇〇石を嗣いだ坂井小左衛門師昌⁽²⁰⁾は、文化一二年三六才で加州郡奉行となり、文化一四年三八才で頭分の大小將横目（役料知一〇〇石）となった。その後文政五年四三才で竹沢御側番頭（役料知一五〇石）、翌六年四四才で小將頭となり、数年で役料知二〇〇石の頭分に至っている。その後文政八年馬廻頭となるが、文政九年四七才の時「本役共指除遠慮」（「諸頭系譜」）となっている。本役は馬廻頭のことであり、指除の理由は小將頭になったときから兼役していた学校方御用であった。その後遠慮は御免となり、文政一三年五一才で馬廻頭に帰役、

天保五年五五才で定番頭並(役料知三〇〇石)、弘化元年(一八四四)二〇〇石加増され弘化四年六八才で亡くなっている。坂井師昌は短期間で馬廻頭まで至り、一旦指除を受けるが、数年後帰役し、更に上位序列である定番頭並に至っている。七〇才を超して人持末席に至る事例もあるが、人持末席には至っていない。「指除遠慮」が影響したか確認できないが、指除後の処罰が遠慮であれば、遠慮が免ぜられれば、同列の頭分に帰役できることが確認できる。

これらの事例から、頭分の異動は、基本的には、一旦頭分になれば、病気などによる依願御免および指除がなければ、致仕・隠居・死亡まで間断なく頭分であり続け、異動があれば上位序列の頭分へ異動していることがわかる。異動により役料知が変わる場合は、より高い役料知の頭分へ異動しているのである。そのため、先述した序列と役料知が逆転している使番や横目の事例でも確認できたように役料知は異動により下がることはない。さらに、依願御免および「指除遠慮」の後に遠慮が「御免」となった場合は「御免頭」等と呼ばれ、再び頭分に就くことができる。その場合でもそれ以前と同等の頭分に任ぜられるのである。

このような頭分の異動に関して、諸頭・諸役ごとに歴代を記した「諸頭系譜」では、その藩士が前後に勤めた諸頭・

諸役も記されている。役料知二〇〇石の頭分から始まる事例や、役料知一五〇石の頭分を飛ばし、より上位序列の頭分となる事例は確認できるが、序列が下がる、または役料知が減らされる異動事例は確認できない。頭分のままでのいわゆる降格はないが、遠慮より重い逼塞の場合は、赦された後は頭分ではなく組外組に加えられる事例²¹⁾がある。その場合は後に改めて頭分となった事例は確認できない。更に重い閉門の場合は、組外組に加えられた後閉門となる事例²²⁾があり、これは、まず頭分から外した後に閉門とすることである。その後閉門御免、遠慮、遠慮御免となっても、多くはそれまでに亡くなっている事例が殆どである。それでも頭分に戻った事例は一例、小川八郎右衛門安村のみである²³⁾。

三、頭分と兼役

頭分の異動について、「諸士系譜」²⁴⁾では「段々昇進」と表記するにとどめることが序で記されている。頭分の異動よりも御用方の奉行等が記されているのである。これは前項で述べたように頭分の異動がより上位序列への異動のみであることによる。一方、御用方は頭分のような明確な

序列はないが、序列がある頭分が兼役・兼帯することにより、頭分の序列が反映された形で「序列」が存在している。

このことに関して湯浅祇庸は「北藩秘鑑」（巻五）において、「人持并組頭打交役義」・「組頭兼役御人高」・「物頭兼役御人高」等と項を立てている。人持と共に組頭（組頭並以上の頭分）が兼役する役職、組頭が兼役する役職、物頭が兼役する役職とそれらの定員をまとめている。これは、頭分の序列により兼役できる役職が定まっている、または、ある頭分にならないと兼役できない役職があることを示している。以下、「諸頭系譜」に記載された兼役を命じられた時点の頭分の構成比（表4）等を確認し、頭分の兼役についてみていく。

①人持と共に組頭が兼役する役職（算用場奉行・近習御用・公事場奉行）

算用場奉行を兼役した組頭とは、定番頭・馬廻頭・小將頭・組頭並であるが、同じ湯浅が著した「藩国官職通考」では、一人は人持、二人は馬廻頭とし、「定番頭或組頭並よりも勤之」としている。元禄三年（二六九〇）以降算用場奉行を命ぜられた時点の頭分は、馬廻頭が四三・二%、組頭並が九・〇%である。人持も四〇・五%を占め、定番頭・小將頭は少ない。宝暦六年（二七五六）に小將頭の窪田主馬

秀貞が兼役するまでは馬廻頭のための兼役であり、文化期以降組頭並が増加していることを考慮すれば、本来的には馬廻頭が兼役する役職といえる。

近習御用については、「諸頭系譜」では御用部屋とし延享二年（二七四五）七代宗辰以降記されている。概ね近習御用は、人持・組頭などが兼役する「御用部屋」と物頭以下が兼役する「近習頭」の総称といえるが、それらの違いは「諸頭系譜」では明確ではなく数的に把握するには問題点がある⁽²⁵⁾。しかし、組頭以上の平士で兼役の傾向をみると、人持が三八・六%、その他は大きく定番頭が一六・九%、馬廻頭と組頭並が一五・七%、小將頭が一三・三%である。

つまり御用部屋は特定頭分の兼役ではないことが窺え、また後に人持末席に至る事例が多く確認できる役職でもある延享二年以降御用部屋を兼役し、後に人持末席に至った平士は一〇名、その内八人⁽²⁶⁾が御用部屋を勤めている。当然ではあるが藩主の近くで「器量」が認められれば昇進し易く人持に至る可能性が高いといえる。残り二人の内、遠田三郎大夫自邇については祖父勘右衛門が六代吉徳の代に人持に至っていた。しかし、父の早世により自邇は人持を継ぐことができなかったが、その点を考慮された特殊な事例であろう。残る一人は原弾正元成で、家督前、表小將番

表4 兼役における頭分等の構成(「諸頭系譜」より作成)

算用場奉行		元禄3年以降
就任時頭分等	人数	割合
人持	45	40.5%
定番頭	5	4.5%
馬廻頭	48	43.2%
小将頭	3	2.7%
組頭並	10	9.0%
計	111	

公事場奉行		元禄3年以降
就任時頭分等	人数	割合
人持	112	86.2%
定番頭	2	1.5%
馬廻頭	15	11.5%
小将頭	1	0.8%
計	130	

御用部屋		延享2年以降
就任時頭分等	人数	割合
人持	32	38.6%
定番頭	14	16.9%
馬廻頭	13	15.7%
小将頭	11	13.3%
組頭並	13	15.7%
計	83	

判物方御用		享保11年以降
就任時頭分等	人数	割合
人持	5	6.8%
定番頭	42	57.5%
馬廻頭	19	26.0%
小将頭	3	4.1%
組頭並	4	5.5%
計	73	

組頭並以上

学校方御用		寛政3年～天保10年
就任時頭分等	人数	割合
定番頭	1	1.7%
馬廻頭	9	15.5%
小将頭	1	1.7%
組頭並	7	12.1%
持弓筒	1	1.7%
先弓筒	10	17.2%
物頭並	6	10.3%
組外番頭	5	8.6%
定番御番頭	5	8.6%
寺社奉行支配	13	22.4%
計	58	

宗門奉行		元禄3年以降
就任時頭分	人数	割合
馬廻頭	91	65.5%
小将頭	46	33.1%
持弓筒	1	0.7%
先弓筒	1	0.7%
計	139	

学校方御用		天保10年以降
就任時頭分等	人数	割合
人持	1	4.8%
定番頭	1	4.8%
馬廻頭	17	81.0%
小将頭	1	4.8%
物頭並	1	4.8%
計	21	

明倫堂・経武館督学

儉約奉行

享保13年以降

就任時頭分	人数	割合
定番頭	2	1.2%
馬廻頭	33	19.9%
小将頭	14	8.4%
組頭並	3	1.8%
新番頭	3	1.8%
歩頭	7	4.2%
大組頭	3	1.8%
持弓箭	11	6.6%
先弓箭	46	27.7%
組外番頭	29	17.5%
定番御番頭	13	7.8%
馬廻番頭	1	0.6%
奥小将横目	1	0.6%
計	166	

領国鉄炮改

元禄3年以降

就任時頭分	人数	割合
大組頭	11	20.8%
持弓箭頭	22	41.5%
先弓箭頭	20	37.7%
計	53	

領国盜賊改

元禄3年以降

就任時頭分	人数	割合
馬廻頭	3	3.8%
鎗奉行	1	1.3%
大組頭	4	5.1%
持弓箭頭	19	24.4%
先弓箭頭	50	64.1%
物頭並	1	1.3%
計	78	

近習頭

元禄3年以降

就任時頭分	人数	割合
小将頭	4	2.5%
組頭並	3	1.9%
鎗奉行	1	0.6%
新番頭	1	0.6%
歩頭	2	1.3%
大組頭	7	4.5%
持弓箭頭	10	6.4%
先手物頭	33	21.0%
物頭並	25	15.9%
表小将番頭	12	7.6%
金谷表小将番頭	2	1.3%
組外番頭	4	2.5%
使番	43	27.4%
表小将横目	6	3.8%
台所奉行	1	0.6%
頭並	2	1.3%
寺社奉行支配	1	0.6%
計	157	

「近習御用」含まず

御用人

元禄3年以降

就任時頭分	人数	割合
馬廻頭	1	0.5%
小将頭	8	4.4%
鎗奉行	1	0.5%
新番頭	3	1.6%
歩頭	44	24.0%
大組頭	9	4.9%
持弓箭	13	7.1%
先弓箭	103	56.3%
物頭並聞番	1	0.5%
計	183	

頭・先筒頭の時に近習頭を兼役しているが、宝暦一四年馬廻頭となり、公事場奉行や勝手方御用を兼役し天明五（一七八五）年人持末席に至っている。定番頭を経ずに人持末席に至り、その後若年寄にまでなっていることから、近習頭で「器量」を認められ公事場御用や勝手方御用で才覚を発揮し、御用部屋とは異なったルートであるが、藩主に認められた事例と考えられる。

なお、公事場奉行は本来人持が勤める役職とされているが「時により御馬廻頭より」（「北藩秘鑑」と記されている。元禄三年以降公事場奉行を命ぜられた人持は一一二人（八六・二％）、定番頭二人、馬廻頭一五人、小將頭一人であった。頭分の中での馬廻頭の比率は八三・三％であり、公事場奉行は時に組頭が兼役する場合があるが、その多くは馬廻頭の兼役であった。

②組頭が兼役する役職（判物方御用・宗門奉行・省略方御用・学校方御用）

判物方御用は享保一二年（一七二六）以降の役職で、人持五人、定番頭四二人（五七・五％）、馬廻頭一九人（二六・〇％）、小將頭三人、組頭並四人である。組頭兼役の御用方であるにもかかわらず人持が兼帯していることについて「北藩秘鑑」には、「定番頭并御近習御用之内より、御馬廻

頭よりも」と記されている。定番頭からの兼役が主であるが近習御用（御用部屋）を兼役した人持・小將頭・組頭並が結果的に兼役となり、定番頭や馬廻頭にも近習御用兼帯が存在することから、上記のような構成に成ったと考えられる。

宗門奉行は「御馬廻頭より、御小將頭よりハ加人」（「北藩秘鑑」と記されている。元禄三年以降では、馬廻頭九一人（六五・五％）、小將頭四六人（三三・一％）、持弓頭・先手物頭各一人であるが、時期的に構成が変わっている。天明期までは馬廻頭四六人に対し小將頭六人で、寛政期以降小將頭の割合が増え、享和期以降は馬廻頭三七人、小將頭三五人となる。享和期以降の小將頭のほとんどは「加人」であることから、儉約奉行の本役は馬廻頭からの兼役、加人は享和期以降小將頭からの兼役といえる（²⁷）。

省略方御用は、「諸頭系譜」では省略奉行とされ、享和三年（一八〇三）儉約奉行から改めた役職である。儉約奉行は享保一三年以前には断絶があったがそれ以降は享和三年まで続いている。組頭の兼役とされているが、兼役する頭分は定番頭から奥小將横目まで幅広く、主な頭分は馬廻頭三三人（一九・九％）、小將頭一四人（八・四％）、持弓筒頭一一人（六・六％）、先弓筒頭四六人（二七・七％）、組外番

頭二人（一七・五％）、定番馬廻番頭一人（七・八％）である。このことについて「藩国官職通考」では「両組頭、御歩頭以下物頭、組外・定番御馬廻両番頭ヨリ兼之」とし、頭分を三段階に分け、それぞれから兼役することを指摘しているように見える。このことは同じ省略奉行であつてもその内実は階層が異なる奉行が存在していることを窺わせる。

学校方御用は、寛政三年（一七九二）の藩校設置に伴う役職で、天保一〇年（一八三九）「学政御修補」において明倫堂督学、経武館督学に改められる。天保一〇年以前での頭分兼役は馬廻頭九人（一五・五％）、組頭並七人（二・一％）、先弓筒頭一〇人（二七・二％）、物頭並六人（一・三％）、組外番頭五人（八・六％）、定番馬廻番頭五人である。その他頭分ではないが「寺社奉行支配」一三人（二・四％）が確認できる。「寺社奉行支配」とは、その多くは、かつて人持や人持末席であつた家の直系で、平土組の支配には属さず寺社奉行の支配に置かれていることからそのように記されている⁽²⁸⁾。人持ではないのでその後頭分になる事例も多いが、寺社奉行支配の時点では頭分ではない。そのため頭分の兼役から除いて検討すると、学校方御用も省略方御用と同様に階層が異なる奉行（御用）が存在していることを窺わせる。そのことは「学政御修補」後の督学は馬廻頭が

一七人（八一・〇％）であり⁽²⁹⁾、「諸頭系譜」ではその督学以外に「当分経武館督学江加可相勤、明倫堂御用之筋可有示談旨」とされた頭分を挙げている。それらの多くは物頭以下の頭分が主体であつた。したがって「学政御修補」以前は組頭以上とそれ以下の学校方御用、同じ役職名でありながら異なる階層の役職が存在していたことを窺うことができるのである。

③物頭が兼役する役職（近習頭・御用人・射手異風裁許・鉄炮改奉行・盜賊改奉行・二之御丸広式御用）

近習頭については「諸頭系譜」では歴代がまとめられていないため、兼役の構成は明確ではないが、「組頭ヨリも勤之、御奥小将・御表小将兩番頭、兩横目ヨリ必兼帶之、御使番ヨリも兩人ハ必勤之」（「北藩秘鑑」巻五）とある。物頭兼役の他に両（奥・表）小将番頭・横目と使番、組頭が兼役とする。「諸頭系譜」で各頭分の兼役に「近習頭」と記された事例を確認すると、一五七人が確認できる。使番からの兼役が最も多く四三人（二七・四％）、次いで先手物頭三人（二一・〇％）、物頭並二五人（一五・九％）、表小将番頭二人（七・六％）、持弓筒頭一〇人（六・四％）、大組頭七人、表小将横目六人の他、小将頭・頭並・鎗奉行・新番頭・歩頭・組外番頭・台所奉行・頭並である。ここでは「近習

頭」のみを扱ったため「近習御用」と記された近習頭を含まず、正確な数字とはいえないが、兼役する頭分の幅が広いことが特徴である。

このことについて、定番頭まで勤めた池田保左衛門景福⁽³⁰⁾の事例をみると、寛政二年家禄二五〇石組外組、翌三年大小将組に組替、享和二年役料知一〇〇石の頭分大小将横目となる。文化元年（一八〇四）三月には表小将横目となり近習御用（近習頭）兼役、以後近習頭兼役のまま同年一〇月役料知一五〇石使番、文化三年四月表小将番頭、同年閏五月奥取次、文化五年奥小将番頭、文化一一年持簡頭、文政三年（一八二〇）新番頭、文政五年役料知二〇〇石の小将頭、文政六年七月竹沢御殿（斉広）附御側組頭に被命されるまで近習頭を兼役し続ける。そして、同年一二月一五〇石加増され家禄四〇〇石となり、斉広逝去に伴い一時的に御免頭となるが、文政九年二月馬廻頭となり、八月宗門奉行兼役、文政一一年近習御用（御用部屋）兼役、翌一二年宗門奉行・御用部屋兼役のまま定番頭並（役料知三〇〇石）、天保五年（一八三四）定番頭となり兼役免除、天保一三年隠居している。近習頭や御用部屋を兼役しているとみるより、近習御用を勤めながら頭分の序列が上がり役料知も上がっていったとみるべきであろう。このような事例に

より近習頭を兼役する頭分の幅が広がったものと考えられる。同様の事例としては大野織人定能が挙げられる。定能は文政一一年表小将から使番となり近習頭を兼役する。その後表小将番頭・先簡頭・歩頭と序列が上がりつつも近習頭を続け、天保一〇年町奉行となり、翌一一年組頭並になったときには御用部屋兼役となっている。その後も小将頭・馬廻頭・定番頭並と進み嘉永四年（一八五二）五八才で亡くなるまで御用部屋を勤めている。

ところで使番については、兼役である「近習頭」と同意の「近習御用」と記された事例も多い。どちらかが記されているのは明和八年（一七七二）以降で、十代藩主重教が隠居し、十一代治脩に代替わりの時期からである。その時期以降使番を勤めた藩士は一七三人で、その内近習頭・近習御用を勤めた者は八二人（四七・四％）である。時期的変動があり、明和・安永期には七割を超し、そこから徐々に下がり嘉永・元治は三割を切るようになるが、慶応二年（一八六六）以降は増加している。これは、隠居した前藩主に付く近習御用の存在が影響しているものと考えられる。なお、使番は序列的には頭並や横目等の役料知一〇〇石の序列であるが、役料知は一五〇石で、番頭や物頭並等と同じであるため二つの側面を持っている。初めての頭分として

使番になる場合と、役料知一〇〇石の頭分から使番になる場合とがある。元禄三年以降における使番被命前の状況をみると、前者では奥・表・側・大小将組から併せて一五〇人（七〇・二％）が使番となり、後者では奥・表・大小将横目など頭分併せて三九人（一八・二％）が使番となっている。つまり小将関係で約九割を占め、その主体はいずれも表・大小将である。

表・大小将（横目）から使番となり、近習頭を勤め、近習としての「器量」が藩主に認められれば序列が上がり、御用部屋となり、場合により平士の枠を越え人持末席へと至るのである。つまり、加賀藩で頭分として序列を上げていくためには、頭分以前では、表・奥・大小将、初期になる頭分では使番、兼役御用としては近習御用（近習頭・御用部屋）、これらが重要であり、早い段階でこれらに至ることができれば「器量」により序列を上げる機会が広がるのである。

御用人は、「御歩頭ヨリ御先手物頭迄之内」としているが、元禄三年以前には人持・馬廻頭・小将頭が物頭と大差なく兼役している。それ以降は、一八三人の内、先弓筒頭一〇三人（五六・三％）、歩頭四四人（二四・〇％）、持弓頭一三人（七・一％）、大組頭九人（四・九％）である。小将頭も八

人確認できるが、その内五人は元禄期での兼役であり、御用人は先弓筒頭と歩頭の兼役といえる。

射手裁許・異風裁許は組方の役職であるが、頭分の兼役となっている役職である。射手裁許は元禄三年以降七十二人が勤めるが、持弓筒頭六人以外はすべて先弓筒頭（九一・七％）の兼役、異風裁許もほぼ同傾向で九七人中、頭並一人、持弓筒頭九人以外はすべて先弓筒頭（八九・七％）の兼役である。また、文久三年（一八六三）に異風裁許に統合される御領国鉄炮改奉行の兼役は持弓筒頭二一人（四一・五％）、先弓筒頭二〇人（三七・七％）、大組頭一一人（二〇・八％）で、同じ物頭ではあるが、射手裁許や異風裁許の主体である先弓筒頭よりも序列的に上位の大組頭や持弓筒頭の割合が高い。同じ物頭の兼役が主体の御領国盜賊改奉行は先弓筒頭五〇人（六四・一％）で主体を占めるが、時期的に変動が見られる。宝暦九年（一七五九）以前では、持弓筒頭が主体で大組頭が続き、先弓筒頭は少数である。宝暦九年以降は幕末に馬廻頭が三人兼役する以外はほぼ先弓筒頭で占められている。

二之御丸広式御用は、前藩主正室が金沢城在住の際に付いた物頭兼役の役職である。一二代藩主斉広の正室真龍院が金谷御殿に移ったときは金谷広式御用と呼称していた。

しかし、江戸藩邸における「江戸広式御用」は藩主正室に付く物頭であるが、物頭兼役ではなかった。「御役に付物頭並」とされているのである。物頭兼役の場合は物頭が主体で、その他の頭分も兼役する場合が一定程度存在する。「藩国官職通考」では、二之御丸広式御用について「金沢留守居番は即勤之」とありその他大組頭以下の物頭、組外・定番馬廻番頭の兼役としているが、役料一〇〇石の頭並も兼役している。「御役に付物頭並」は、物頭並であつた頭分が兼役するのではなく、基本的には物頭並より下位列の頭分または頭分ではない平士がこの役につくことにより物頭並となり、兼役するものである。江戸広式御用は文政期までは物頭並の兼役であるが、天保期以降は持弓頭などの物頭や頭並も兼役するようになる。一三代藩主斉泰の正室溶姫の場合は「御守殿附御用」とも呼ばれ、將軍家斉の子女であつたため役料二〇〇石の組頭並も兼役に含まれていた。典型的な「御役に付物頭並」といえるのは藩主生母（〇〇院）や他家へ嫁いだ姫（〇〇御前）に付く物頭並である。史料上の表記では、「院（御前）様附物頭並」とされる場合が多い。同様の役職としては聞番がある。「物頭並聞番」といわれ、聞番に就いた当初は全員が物頭並である。その後は物頭並としての転役や別の頭分への異動の事例が多いが、

表5 頭分の兼役状況

頭分 兼役	頭並	大小将横目	表小将横目	奥小将横目	使番	横目	定番馬廻番頭	馬廻番頭	大小将番頭	組外番頭	表小将番頭	奥小将番頭	物頭並	先手物頭	金沢留守居番	持弓簡頭	大組頭	歩頭	新番頭	小將頭	組頭並	馬廻頭	定番頭（並） （人持）
公事場奉行	◎	・	△	・																			◎
算用場奉行	○	・	○	・	△																		○
御用部屋	◎	○	○	○	○	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	◎
(近習頭)																							
判物方御用	△	◎	○	△	△																		△
宗門奉行(本役)				◎	△																		◎
宗門奉行(加人)				◎																			◎
儉約奉行		・	◎	○	・	・	△	・	○		◎												◎
学校方御用		・	◎	・	○				・		◎	○											◎
明倫堂・経武館督学	・	・	◎	・																			◎
御用人			・	△	△	・	◎	△	△		◎	・											◎
射手裁許									△		◎												◎
異風裁許									△		◎												◎
領国鉄炮改									○	◎													◎
御領国盜賊改			△						△	○	◎	・											◎
江戸広式御用					○				・		◎												◎
(二ノ丸広式御用)										○													◎
院(御前)様附物頭並													◎										◎
聞番													◎										◎

近習頭には「近習御用」含まず

◎主体として確認

○確実に定量確認

△少数定量確認

・数例確認

中には聞番のまま役料知二〇〇石の組頭並となる場合（組頭並聞番）も存在する。

以上、頭分が兼役する御用方の役職について概観してきたが、頭分の序列に対応する形で兼役する役職が決まっていることが確認できた。しかし、頭分の序列のような固定的なものではなく、役職により兼役する頭分の幅に大小あり、幅が大きい場合は、同名役職でも階層差があり役割が異なる可能性が窺われる（表5）。近習御用における御用部屋と近習頭もその一例といえるが、近習御用の事例で見たように、同じ御用方の役職を長く勤めることにより、頭分の序列が順次上がっていくことなどは、各頭分が序列のみの形骸化傾向にあることも窺わせる。

四．町奉行・魚津在住・今石動等支配と「頭分」

その他、前章でみてきた頭分の兼役とは異なる事例も存在する。それは町奉行と魚津在住・今石動等支配である。

「北藩秘鑑」では役料知二〇〇石の頭分としている。

魚津在住・今石動等支配は人持か平士かどちらかが勤める役であり、平士のときのみ役料知が付く。元禄三年（一六九〇）以降魚津在住は人持二七人、平士二二人であるが、

特に元禄一〇年～明和八年（一七七二）までについては人持一人、平士一〇人である。今石動支配は、人持二六人、平士一三人で宝永七年（一七一〇）～寛政元年（一七八九）までは人持五人、平士一〇人である。本来的には人持の勤める役であるが、宝永～天明期を中心に平士が勤めている状況である。人持が勤めている場合は、頭分の兼役とはならないが、これまで人持と平士頭分が勤めた算用場奉行等の役職の場合は、平士は馬廻頭等の頭分として兼役しており、その頭分としての役料知が伴っていた。ところが、この魚津在住・今石動等支配は人持が勤める役にもかかわらず平士が勤める場合は、役料知二〇〇石が与えられ、頭分の兼役であるかのように扱われている。そのため多くの場合、魚津在住・今石動等支配に就く以前は役料知一五〇石以下の頭分であり、その後は役料知二〇〇石以上の頭分に異動している。

町奉行についても、魚津在住・今石動等支配と同様に役料知二〇〇石の頭分であるかの如くに扱われている。しかし、岡田太郎右衛門正誼（家禄九〇〇石）は、天明五年（一七八五）九月二一日に御免頭から馬廻頭になるが、その二日前の一九日から町奉行を勤めている。町奉行が頭分であるならば、御免頭↓町奉行↓馬廻頭となるはずであるが、

馬廻頭として天明六年三月まで「当分町奉行兼帯」し、その後宗門奉行・儉約奉行・算用場奉行を兼役し馬廻頭を寛政三年六月まで勤めている。また、山崎頼母籍侃（家禄七〇〇石→八五〇石）は、文化九年（一八一二）先筒頭から歩頭となり、近習御用（近習頭）を兼役していたが、文化一二年町奉行となり近習御用は御免となる。その後文政二年（一八一九）に「組頭並被仰付、町奉行如元」³¹となり算用場奉行も兼役し、文政六年に馬廻頭となった後も算用場奉行を兼役している。町奉行も兼役するが数ヶ月で御免となっている。

町奉行が組方の頭分であるのか、御用方であるのかにより転役・兼役の内容が異なってくる。組方の頭分と考えるとき歩頭→町奉行→組頭並→馬廻頭となり、役料知的には一五〇石から二〇〇石の頭分への転役であり問題はないが、二つの頭分を兼ねる事例については、表・奥小將の横目や番頭が互いを兼ねる以外はみられない。後任が決まるまでの「当分」はあるにしても山崎籍侃が文政二～六年の組頭並の期間に別の頭分を兼ねることは臨時的な例外とはいえない。町奉行を御用方と考えると、頭分は歩頭→組頭並→馬廻頭となり、兼役する御用方が近習頭→町奉行→町奉行・算用場奉行→算用場奉行となる。この場合の役料知は、歩

頭で町奉行兼役、組頭並で町奉行兼役となるが、役料知が併せられるとは考え難い。実態は町奉行もしくは組頭並の二〇〇石のみと考えられるが、組方の役料知と御用方の役料知が重なるように見える。なお、山崎籍侃は馬廻頭の後天保七年（一八三六）に定番頭並となり魚津在住を兼役、その後天保八年正月から六月まで「町方御用兼」役している。この町奉行兼役は、町奉行沢田義門亮采の死後から半田左門景員の就任までの臨時と考えられるが、この時期の魚津在住は人持が勤めている時期である。定番頭並が勤めるのは例外的で、人持に適任者がいなかったのかは明確ではないが、定番頭並の兼役として勤めている。

享和三年（一八〇三）に今石動等支配となった高島五郎兵衛厚定（家禄七〇〇石）について、「諸頭系譜」には「常例頭分ヨリ被仰付候時ハ、列此所ニ候得共、五郎兵衛儀ハ同年九・十二格別被仰出、御馬廻頭次、御小將頭上江列被仰出、文化元・五・七馬廻頭」との注記がある。厚定は享和元年十月馬廻頭を指除となり、翌二年七月指除御免、享和三年七月今石動等支配となったが、その時の序列についての注記である。通常、平士頭分から今石動等支配になった場合は、物頭の列であるが、厚定は格別に馬廻頭の次列、小將頭の上列との藩主よりの指示があり、文化元年には馬

廻頭に帰役している。この事例から、御免頭でありながら享和三年七月から文化元年五月まで約十ヵ月今石動等支配を勤めていたことになる。馬廻頭に帰役したとき「公事場奉行兼帯被仰付、御役料知二〇〇石被下置、最前之御役料知被除之」⁽³²⁾とあり、今石動等支配は人持の奥村源左衛門尚之に引き継がれている。

町奉行に関しては「天和二・九・六組頭列極」(「諸頭系譜」)とあり、「藩国官職通考」(巻三)では「寛文七年月日欠、里見七左衛門元茂・岡田十右衛門貞知兩人、御先手物頭ヨリ兼帯被仰付ノ処、天和二年九月二十六日組頭列二御極、御小將頭列二命セラル」とある。里見七左衛門元茂(家禄九〇〇石↓一二〇〇石)の由緒帳⁽³³⁾には、万治二年(一六五九)金沢町奉行、寛文五年(一六六五)町奉行のまま本多安房組の「足輕式拾人御預」(先手物頭)、寛文八年三〇〇石加増され「町奉行列御改、組頭並被仰付、安房守組御指除被成候、延宝八年町奉行役料知貳百石被下置」とあり、貞享四年(一六八七)馬廻頭となっている。遅くとも天和二年(一六八二)までに、町奉行は組頭列となり役料知が二〇〇石となったことは間違いないであろう。その天和二年には定番頭は存在せず、組頭は馬廻頭と小將頭のみである。その段階で「小將頭列」に命ぜられているが、

「列」の解釈については、町奉行に付いた藩士の序列は小将頭と同列(順序としては小将頭の次)であると定めたものと理解できる。物頭の兼帯から小将頭の兼帯へと位置づけを上げたのではなく、あくまで序列を定めたに過ぎない。そのため、享保元年(一七一六)七月に組頭列の頭分である組頭並が定められた時、町奉行は組頭並と同じ役料知であるが序列は組頭並の次列となったのである。また、町奉行の序列は、組頭並以上の頭分による町奉行兼役の場合は序列は頭分により、物頭以下の兼役の場合は組頭並の次列となるのである。

つまり、町奉行も魚津在住・今石動等支配も組方の頭分ではなく役料知二〇〇石の御用方である。魚津在住・今石動等支配については、役料知一五〇石の物頭から兼役する場合が多く、その後は役料知二〇〇石の頭分となるため、魚津在住・今石動等支配が実質的に役料知二〇〇石の頭分と何ら変わらない状況といえる。しかし、御用方であるためであろうか高畠厚定のように御免頭でも勤めることができるのである。一方、町奉行も御用方であり、そのため頭分ではない平士が勤める事例が確認できる。享保九年小松町奉行から町奉行となった伊藤彦兵衛忠勝(家禄一〇〇〇石)は同一五年馬廻頭となり、享保一二年小松町奉行から

町奉行となった小堀牛右衛門永頼（家禄二〇〇〇石）は元文五年（一七四〇）馬廻頭、寛延四年（一七五一）定番頭となる。寛政元年作事奉行から町奉行となった小寺武兵衛惟孝（家禄五〇〇石→六〇〇石）も寛政三年馬廻頭となっている。頭分ではない平士が役料知二〇〇石の町奉行を経て頭分となる場合は、初めての頭分であっても序列に従い、組頭列の町奉行からの異動として、組頭並以上の頭分となるのである。

町奉行も魚津在住・今石動等支配も詳細に見れば御用方の役職であるが、実態としては役料知二〇〇石の頭分であるかの扱いをされているように見えた。これは、頭分を組方の役職として見てきたことによる。御用方の役職である町奉行も「組頭列」として頭分に組み込まれていたのである。そのことは、「頭分」は組方の役職でも、御用方の役職でもないことを示している。つまり、「頭分」は、組方由来の頭分と御用方由来の頭分が存在しているため、組方・役方の区別や違いとは関係のないものと考えなくてはならない。預かる組は組方であっても、執り行う勤めが御用方であっても、組方の頭であると同時に「頭分」として預かり、兼役しているのである。定番頭並・組頭並・物頭並・頭並など組方の名称を付けているが、組を預からない、定数も

ない頭分もまた、組方でも御用方でもない「頭分」故に設けることができたものと考えられる。また、細工奉行、台所奉行も町奉行と同様に役料知（一〇〇石）を伴う「頭分」に組み込まれたものと考えられる。

五、加賀藩の役料制と幕府の役料制

以上、加賀藩の職制の一端を役料知により整えられた頭分の視点でみてきた。ここでは、幕府の役料制との比較をすることにより加賀藩の特徴を確認し、まとめに代えることにする。

泉井氏³⁴は家綱時代に幕府の官職制は一応の整備は終わったとして、役職に就くことにより経費がかかり「何らかの反対給付」が必要となり、寛文五年（一六六五）に主に「番方の役職」に対し、翌六年に主に「役方の官職」に一定の蔵米を役料として支給したとする。そして寛文の「役料の創設は職制の分化、職務分掌の明確と共に生じた役職間の上下の格式を明確に規定するものでもあった」としている。天和の役料廃止、元禄の役料復活を経て享保の足高の制定に至るが、元禄の役料の給付の方法は寛文の給付方法とは異なり、「役職ごとに基準の家禄を定め、それ以下の

者に対して定額の役料を給付する」とし、基準家禄を定めた点は享保の「足高制への過渡的」なものであるとしている。「家禄の大小による経済的な負担の不均衡の緩和」を図った役料制の復活であるが、定額のため、基準家禄を大きく下回る者には有効ではなかったとしている。享保の足高制では、役ごとに基準家禄を設け、それ以下の者に対して基準家禄まで在職中に限り加給することにより、これまでの家禄と役職・役料（定額）の関係の矛盾を解消する。結果として、役方においては小禄者の登用が増えると共に、世襲できる家禄加増が減少し、番方においては、反対の傾向、基準家禄を上まわる者の就任が多くなり、在職中の加給も家禄加増も減少している。役方における人材登用と幕府財政の節約が足高制によりもたらされた事を明らかにしている。そして、役職における身分制社会の弊害（家格と能力の不一致）を解消するには、「役方の役職」（才能力量が重視される役職）と「番方の役職」（形式的な格式を重んじる名誉職）との二つの役職の存在が好都合であったとし、足高制の実施により、小禄者の重職起用が可能となったとしている。また、それは「足高制実施が、幕府役人の官僚化を促す大きな役割を果たした」とし「幕府権力構造の大きな変化を汲み取ることができる」と結んでいる。

幕府重臣層の役料制と加賀藩平士層の役料制の比較は直接行えるものではないが、加賀藩の役料制を確認するため敢えて比較することにする。加賀藩の役料について、青地礼幹の「可観小説」³⁵⁾には「微妙公御代寛永年中初而被定、足軽頭其外諸頭役料ハ松雲公御代二段々被仰付、江戸表にハ元来無之」と記している。幕府より早く、三代藩主利常の頃、寛永年中から役料制が始まり、寛文元年の侍帳でも確認できる。幕府と加賀藩の役料制を比較すると、まず、役料自体が、幕府は蔵米の俵取り、加賀藩は知行取りである。幕府の役料は番方・役方の両方の役職に付くが、加賀藩の場合は、人持以上には役料知が付かず、「頭分」に役料知が付く。その多くは番方（組方）の役職で役方（御用方）は少ない。そして「頭分」が主に御用方の役職を兼役し、役料知で整えられた「頭分」の序列により御用方の役職も厳密ではないが序列化していく。

幕府の基準家禄の設定と在職期間のみの加増について、加賀藩で基準家禄といえ、頭分となる基準（一五〇石以上）と平士から人持となる基準（千石超）の二つが想定できる。基本的にはいずれも世襲できる加増で対応しており、足高制のような在職期間とは関係がない。ただし幕末に家禄一五〇石以下の者を頭分にするため「役中引足」してい

る事例がある。「御家録方調書」⁽³⁶⁾には、「一、百五十石以下之人々、是迄頭役被仰付候節者、根知行御引足に相成候へ共、左候而者格別勤功等無之而者、容易に難被仰付候故、自然御撰拳之道にも指障候得共、勤中御引足高に相成候へ者、往々之御出増にも相成不申、且御撰拳之筋も相立可然哉之旨伺に相成候処、今日伺之通被仰出」とある。家禄一五〇石に満たない者を頭分にするときは世襲できる加増で対応してきたが、これでは格別の勤功があつた者しか選ばれないとし、この状況は「撰拳之道にも指障」としている。つまり、「撰拳之道」には格別の勤功は無用であり、個人の器量や才覚が重要であり、格別の勤功は加増の対象であつて、加増せず「勤中御引足高」にすれば格別の勤功がなくても撰拳できるとし、伺は通つたのである。これは幕府の足高制のようにであるが、この役中引足は各役職ごとの基準高ではなく、頭分になることができる最低家禄高で、両者は異なるものである。しかし、人材登用に關していえば、一五〇石未満の平士数は千石未満の平士全体の約四分の一を占め、彼らに門戸を開放した点は大きな意味を持つ筈であつた。残念ながら幕末の軍制改編のため、その成果は表れずに終わることになる。

また、幕府において、役職における身分制社会の弊害解

消として、「役方の役職」と「番方の役職」の存在が好都合であり、足高制により、小禄者の重職起用が可能となつたとも泉井氏は指摘している。加賀藩でも役方（御用方）・番方（組方）の両方の役職が存在するが、五代綱紀は職制改革の中で、延宝から享保期にかけて平士の番方の役職を中心としながらも序列と役料知を与えることにより結果として「頭分」を創出した⁽³⁷⁾。そこには役方・番方の区別はない。そして序列と役料知により整えられた「頭分」に対応した役方の役職が編制されていくのである⁽³⁸⁾。全ての頭分が役職を兼役しているわけではないが、幕府が役職により基準家禄を定め、その差を役料で補つたのに対して、加賀藩は役方の役職に対して、頭分の序列を対応させ、その頭分の役料知を充てたとはいえる。そして家禄が一五〇石以上であれば「器量」により「頭分」となることができ、役方の役職を兼役するが、それが評価⁽³⁹⁾された場合は、より上位序列の頭分に異動し、より高い役料知を得、さらに勤功があれば加増されたのである。「頭分」そのものは序列の上昇の中で短期間で異動するなど形骸化の傾向にあり、序列と役料知の上昇という仕組みにより「器量」ある平士を御用方のより重要な役職に登用していったのである。

おわりに

本稿は、加賀藩における職制の一端を、役料知の視点から窺ったものである。一五〇石以上であれば「器量」により頭分となり上昇する機会があるが、それは平等な機会ではない。身分制社会であるかぎり加賀藩でも藩主や次期藩主の側に仕える者の「器量」は認められやすい。藩主の代替わりに序列を上げる頭分が多いことはそれを物語る。頭分となる以前の状況（組や先代の勤功など）や、各頭分・各役職ごとの詳細な分析が今後の課題である。その分析により頭分となることや序列を上げることの要因が明確になり、八家・人持の低位層である平士層の職制、頭分の実態が見えてくると考えられる⁽⁴⁰⁾。

注

- (1) 「諸頭系譜」は木村信尹が文化六年（一八〇九）に著した、加賀藩における諸頭・諸役の異動をまとめたものである。文化六年以降は藩の書物方が増補している。安政年間まで増補したものの写しである「系譜備考」（氏家文庫一三・〇・一九）
○ 金沢市立玉川図書館近世史料館）、また、その写しで明治初年までを補った「諸頭系譜」（郷土資料〇九〇・八五一 近

世史料館）がある。なお、後者には翻刻された『諸頭系譜』（上・下 二〇一三・二〇一五年 近世史料館）がある。

以降、本文中に「諸頭系譜」とある場合は注を略す。また、所蔵館について「金沢市立玉川図書館近世史料館」は「近世史料館」と略す。

- (2) 「第一節 藩士の身分と格式」（『金沢市史』通史編2「第二章 武士の身分と奉公」二〇〇五）。

(3) 石野友康「加賀藩における貞享の職制改革について」（『加能地域史』三一・二〇〇〇年）、林亮太「加賀藩上級家臣団の職掌と職名の変化について——貞享三年の職制改革後を対象として」（『地方史研究』三六二・二〇一三年）などがある。

(4) 富田景周「帳秘藩臣録」（加越能文庫一六・三〇・五〇 近世史料館）いわゆる侍帳であるが、新知召出の嫡子も書き上げ、石高・組・役職については歩行並み以上を網羅している。なお、数字に関しては数え間違いも含んでいることから、概数として理解してほしい。

(5) 湯浅祇庸「藩国官職通考」（加越能文庫一六・二六・一 近世史料館）。また、翻刻である『藩国官職通考』（石川県図書館協会 一九七〇年）がある。「藩国官職通考」は文化九年に加賀藩の各役職について、その来歴などをまとめたもの。

以降、本文中に「藩国官職通考」とある場合は注を略す。

(6) 泉井朝子「足高制に関する一考察」(『論集日本歴史7 幕藩体制I』一九七三年 有精堂【初出「学習院史学」第二号一九六五年】)

(7) 湯浅祇庸「北藩秘鑑」(加越能文庫一六・二三・四四 近世史料館)および「国格類聚」(加越能文庫一六・二三・四五 近世史料館)。

二つは同じ史料の別名である。湯浅が文化一〇年、前年の「藩国官職通考」に続き、加賀藩の藩制について詳細にまとめたものである。その序文によれば「北藩秘鑑」を標題としているので、本稿では「北藩秘鑑」とする。なお、「国格類聚」についてはその翻刻が『金沢市史』(資料編四 近世二・二〇〇一年 金沢市)に掲載されている。

以降、本文中に「北藩秘鑑」とある場合は注を略す。

(8) 前掲注(3)は「貞享三年の職制改革」として主に年寄層等の上級家臣団の職制改革について取り上げられているが、綱紀の職制改革は平土諸組の職制にまで及んでいた。本稿では、この期間における頭分について詳細を述べる能力はない。職制改革全体の中で位置づける必要があると考えている。

(9) 「知行所附 役料所附之写」(加越能文庫一六・三〇・一九 近世史料館)

(10) 人持以上には役料知は与えられない。平土頭分以外で役料

知が与えられる御用方の役職は、預地方御用(七〇石)と江戸広式御用達・御住居付御用達(五〇石)である。その他、諸組の一部の小頭に与えられる小頭料(三〇石)については、本稿の役料知とは性格を異にするものと考えている。

(11) 下位者を登用する際の具体的な「器量」は、史料ではほとんど確認できない。知識・経験・技術・差配等において優れていることは当然であるが、その他に藩主等上位者からの覚(おぼえ)を得ることに優れていることが含まれると考えられ、藩主の寵愛はその最たるものといえる。なお、下位者からみた藩主・君主等の「器量」については福田千鶴氏の論考(中公新書『御家騒動』二〇〇五 他)がある。

(12) これ以降、各藩士の事例を紹介するが、基本的には「諸頭系譜」(前掲注1)による。但し、事例により「先祖由緒并一類附帳」(加越能文庫一六・三一・六五 近世史料館)も含め紹介するが、その場合は別途注記するが、文庫名史料番号を略す。

(13) 「松雲公夜話」(加越能文庫一六・一一・九八② 近世史料館)によると、小将頭は、組は重いけれども、藩主の廻りに備え、下知は自身(藩主)が行うため、組頭としては軽く、馬廻は前線に出るため下知は組頭次第である。だから馬廻頭は小将頭より重いとされている。

(14)「御親翰之写」『加賀藩史料』元禄三年九月二四日)

なお、「近習番頭」は奥小将番頭および表小将番頭と同意と考えられる。

(15)「先祖由緒并一類附帳」大平三楽(近世史料館)

(16)「加人」については、本来的には、何らかの事由により臨時的に定員外の役職に就かせる場合(「当分加人」)に用いられると考えられる。但し、「諸頭系譜」においては、頭分には加人は確認できない。射手裁許・異風裁許以外は御用方の役職において加人が確認できる。加人の後本役となる場合、また、加人の恒常化が窺われる役職については、別途検討が必要である。

(17)「御家録方調書」『加賀藩史料』慶応三年二月一日)には「一、百五十石以下之人々、是迄頭役被仰付候節者、根知行御引足に相成候へ共」とある。「諸頭系譜」でも一五〇石未満の頭分は確認ではない。

(18)「先祖由緒并一類附帳」浅加九平(近世史料館)

(19)家禄「三之一」による相続は、相続者が幼少の場合、家禄の約三分の一を与え、正式な家督相続までの猶予期間としたものである。成人すれば元の家禄が相続できるが、成人前に亡くなれば家は断絶となる。幼少の実子に相続を望む場合は、「この「三之一」による相続と、順養子(弟等を一旦養子とし

て相続させ、さらに実子をその養子にする)による相続がある。どちらを選択するかは実例の検討が必要である。なお、家禄の三分の一は家禄五〇〇石の場合は一五〇石、一〇〇〇石の場合は三〇〇石である。

(20)「先祖由緒并一類附帳」坂井小平(近世史料館)

(21)使番今村藤九郎は文化二年(一八〇五)役義指除後逼塞となり、文政元年(一八一八)逼塞御免となり組外組に指加えられている。

(22)先筒頭大橋助三(「先祖由緒并一類附帳」大橋又平 近世史料館)は明和九年(一七七二)閉門となり「組外御番頭御用番支配」となり、家禄八〇〇石から四〇〇石に減らされ、安永六年(一七七七)遠慮御免となり、組外組に組入となる。

(23)由緒帳(「先祖由緒并一類附帳」小川恒七郎 近世史料館)には閉門の記載は無いが、天明五年先筒頭で儉約奉行を兼役していた小川安村は、同年二月指除閉門となる。その後天明七年遠慮、翌年遠慮御免となり、寛政三年四月一二日先筒頭再役となる。その翌日には先弓頭に異動し、寛政十年持弓頭、享和二年新番頭、翌三年に隠居し、文化三年七九才で亡くなっている。これは、特殊な事例と考えられるが詳細は不明である。なお、頭分の逼塞・閉門後については、各事例ごとの検証が必要である。

(24) 津田信成が天保三年(一八三二)に加賀藩士(直臣)の系譜をイロハ順にまとめたものである。本稿では、郷土資料(〇九〇・八三六 近世史料館)本を参照している。以降、本文中に「諸士系譜」とある場合は注を略す。

(25) 近習御用については、物頭兼役の役職に近習頭があり、「本名御近習御用与唱」や「但組頭よりも勤之」等の文言があり、史料上組頭が兼役した「御近習御用」の表記は、人持と共に兼役した近習御用(御用部屋)を示すのか、近習頭を示すのか不明である。

このことについて湯浅祇庸は「藩国官職通考」において、人持と組頭が兼役する御近習御用を「何某等席と筆頭の名を称す、俗に御用部屋衆と云」とし、組頭・物頭・諸番頭が兼役する御近習御用を「通俗御近習頭と唱ふ」としている。そして御用部屋衆と近習頭は「両役一名(御近習御用)也」とし元は一役と考え、人持と組頭が兼役する御近習御用は別席にて御用を取り扱うため「御用部屋」となり、組頭・物頭・諸番頭が兼役する御近習御用については頭分より勤めることから「近習頭」となったとする。

当否はともかく、人持であれば「御用部屋」であるが、人持以外はどちらであるか不明であり、「諸頭系譜」での人持と共に兼役する近習御用(御用部屋)の項では、物頭並や持弓

頭・持筒頭・新番頭などが兼役した事例が含まれている。

(26) 富永数馬・戸田与一郎・佐々木兵庫・横浜善左衛門・志村五郎左衛門・勝尾半左衛門・関屋中務・石野主殿助の八人である。

(27) 享和期以降の宗門奉行「加人」は前掲注(16)で述べた加人の恒常化が窺われる役職であろう。本役が馬廻頭、加人が小將頭であることから、頭分の序列が宗門奉行内の階層に反映しているとも考えられる。但し、本役・加人の宗門奉行の実態は事例確認していく必要がある。

(28) 寺社奉行支配については、史料によりその一部は「寄合」や「寄合人持」と表記される場合があり、現時点では同義語と考えられる。また、家禄七〇〇石の戸田家や四五〇石の辻家については、家系に人持や人持末席に至った人物がいない。しかし、戸田家は前田慶次の血筋で、年寄女中今井を輩出し、その養子から寺社奉行支配となり、今井茶湯料三〇〇石を別に宛がわれている家筋である(先祖由緒井一類附帳「戸田厚美」)。辻家は定番馬廻組一〇〇石の家であったが、九郎補平が預玄院(六代吉徳生母)の御使取次となり三五〇石加増され、それ以降寺社奉行支配となる(先祖由緒井一類附帳「辻三郎」)。加増三五〇石の事情は不明であるが異例なことであり、「諸頭系譜」でも「加三百五十石寄合列」とのみ記されている。更

なる検討が必要であるが、とりあえず準人持層の家柄と考えておきたい。

- (29) 馬廻頭以外で明倫堂督学や経武館督学となった頭分は定番頭・小將頭・物頭並各一人、その他人持が一人である。物頭並で明倫堂督学となった渡辺兵大夫栗は天保の「字政御修補」直後最初の督学である。渡辺栗は儒者で藩主の侍講も兼ねていたからであろう。また、元治元年、人持で明倫堂督学となった篠原勘六については、「諸頭系譜」では「被為在思召」とあり、藩主からの特命により本来人持が就くべきではない役職に就かせたものである。「諸頭系譜」では「思召」による事例がみられるが、いずれも藩主がその頭分より下位の頭分もしくは頭分ではない平士が就く御用方の役職を兼役に命じた場合合に「思召」云々の文言が記されている。

- (30) 「先祖由緒并一類附帳」池田保三郎（近世史料館）
(31) 「先祖由緒并一類附帳」山崎幸五郎（近世史料館）
(32) 「先祖由緒并一類附帳」高島辟（近世史料館）
(33) 「先祖由緒并一類附帳」里見亥三郎（近世史料館）
(34) 前掲注（4）
(35) 「可観小説」（加越能文庫一六・二八一・一七七①）近世史料館

- (36) 前掲注（14）

- (37) 綱紀は職制改革の中で、諸頭・諸役の一部に序列と役料知を定め、それが後に「頭分」と呼ばれる様になる。天和二年町奉行を組頭列に定めたが、現町奉行の序列と役料知を定める過程で、小將頭と同様の重職との判断により小將頭次列としたと考えられる。そこには番方・役方の違いの意識はなく、役職の軽重があったと考えるべきであろう。つまり、頭分は本来的に役方・番方の区別とは関係のないものである。

- (38) 綱紀の職制改革以前における馬廻頭等が就いた御用方の役職には、人持・馬廻頭・小將頭・足輕頭の混在状況がみられ、そこには、頭の兼役という視点では捉えることはできない。綱紀が意図していたかは不明であるが、新設された頭を含め、整えられた頭分の序列は、元禄期以降、御用方の役職の兼役に都合がよかった。大藩である加賀藩において、時期を下るにつれ御用方の役職が増え複雑化していく。肥大化した組織において、頭分の序列は、組の序列・石高等と共に有用な基準となったと考えられる。

- (39) 頭分の序列が短期間で上がっている頭分は、御用方の兼役をしている事例が多い。組方の役職は平時の場合、支配下の藩士の管理等であるため、高評価が得にくい。御用方の役職は高評価を得やすい一方、逆の評価も得やすく、それによる「指除」も多いと考えられる。

(40) 平土頭分、時に人持が就く役職を兼ねる組頭以上の頭分の位置づけについては検討が必要である。単なる実務役人を序列や役料知で登用したとは考え難い。加賀藩には、頭分ではない平土が勤めた御用方の役職が多くあり、また、与力や算用者が諸組・諸役・諸場に付けられ実務を果たしている。